

---

# AGAINST THE STREAM

紀迺瀨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

AGAINST THE STREAM

### 【著者名】

紀迺瀬

N4480D

### 【あらすじ】

人間が己の知らぬ間に発している運命の記憶 通称『流れ』。

それに触ることでその人間の人生を覗き見ることができる少年、  
天宮燈徒<sup>アマミヤ・ティト</sup>は友達が死んだ日の翌日、街で見た事のない色の『流れ』を見付けて……

## Prologue (前書き)

注意：一番最初の質問は本気になつて考えなくとも大丈夫です。  
前口上のようなモノだと思つて下さい。

「コレヨリ、アナタ一質問ヲシマス。  
(読むのなら下に、読まぬのならブラウザを使  
いお戻り下セ）

ヨロシイデスカ?

YES or NO

1. アナタハ、アナタガ居ル世界ガ好キデスカ?

YES or NO

2. アナタハ、家族ガ好キデスカ?

YES or NO

3. アナタニハ、大切な人ガイマスカ?

YES or NO

4. アナタニハ、宝物ガアリマスカ？

YES or NO

5. アナタハ、神ヲ信ジマスカ？

YES or NO

6. アナタハ、人ヲ信ジルコトガ、テキマスカ？

YES or NO

7. アナタハ、死ンデモ守リタイ人ガ存在シマスカ？

YES or NO

スカ？

8. アナタハ、人ヲ愛シタコトガアリマスカ？

YES or NO

9. アナタハ、自分ノコトガ好キデスカ？

YES or NO

10. コレガテ最後デス。アナタハ、世界ヲ捨テル  
コトガデキマスカ？

YES or NO

「天宮、お前や……高校出た後のこと全く決めてないんだって？」

「……」

呆れた様に言つ『友達』は、その言葉を無視した俺に対し、溜息をつき俺の隣に腰を降ろした。

「いい加減先のことも決めろよ。じゃなきや、困るのお前だぜ？」

「別に困らないさ。先のことなんて、今から考えても面倒なだけだろ」

「あのなあ……そんなんじゃ今の御時世生きていけないぜ」

困らない物は困りはしないのだ。誰がなんと言おつと、俺のこの考え方かたが変わることはない。だつて俺は今を生きるので精一杯なのだから。誰にも教えないけど。

「流れを頼りにすれば……困ることなんかないから」

「オレにはお前の言う流れってのは良くわかんねえな」

物心ついた頃から俺にだけ見える『流れ』がある。ガキの頃は他の人に見えるのだとと思っていたこの流れは、成長するにつれどんどんハツキリと見えるようになつていて。18の今では瞼を閉じていても暗い闇の中で様々な色をした『流れ』が見えるようになった。

「（ほら、今も）」

視界を掠める紐のようなその『流れ』は、子供の時に友達ができなかつた俺にとって遊び相手の様なモノだった。自分から触ろうと思つて触れば、映画でも見るよう『他人の人生』を見せてくれた。それは幸福なものばかりだったけど、極稀に、とても悲しいモノが混じつていたりした。

「（そんなに他のヤツに見せたいのかよ。バカじゃねえの）」

意識して見ないようにし始めたのは高校に入つてから。圧倒的に多くなつた『不幸』に気味が悪くなつてなるべく避けるようにしていた。他人の人生が見える。人が傍にいると、この『流れ』はもつ

と増える。

「オレは人に流されるのはヤだな……他人に決められる運命つてやつ? なんかウザくね?」

「俺に同意を求めるな馬鹿」

「なんだよー。別に良いじゃんか」

「良くねえから言つてんだろ」

からかうように俺の傍らで笑うコイツも例外ではなく。さつきからチラついている『赤い流れ』はコイツの人生だ。中学になつてからわかつたことだが、この流れについている色は内容によつて決まつていてるみたいだつた。大きく一つに分けると『幸運』と『不幸』。幸運の場合色が『青』に近くなり、『不幸』なら『赤』に近くなる。コイツのは完璧な赤だから、幸せにはなれないな。

「でもさー、お前その流れが嫌いなんだろ?」

「まあな」

「じゃあ、なんで頼るんだ?」

「……自分で選ぶのが面倒だから」

なにもかもが曖昧で、決して現実味を帯びる」との無いこの世界は、きっと流れが見えるからなんだろうと思う。俺は生きてる筈なのに、『流れ』と同じように見えて仕方がなくて。触ろうと思つても触ることができない、つていうことが現実になるのが怖くて、どうしても一線を引いてしまう。

「面倒つてお前なー……まあ、それが天宮の良いところなのかもしれないけどさ」

そう言つて笑う『友達』が、次の日には死んでいるなんて何時もの事で。

「あーあ……また死んだ……。コイツは『流れ』を信じてくれる『友達』だったのに」

悲しいなんてことはない。だつてもつ慣れてしまつたから。でも……でも、ほんの少しだけ、悲しいかもしれない。

「また『友達』が減るなあ……ま、その方が見える俺にも、見えな

い他人にも良いのかもな

昨日まで話していた筈の『友達』が死んだのを聞いたのは家に帰つてから。テレビのニュースで下校途中に交通事故にあって即死したらしい。やっぱり見なくて良かった。アイツの流れを見ていたらきっと死の恐怖を味わう事になつていただろうから。幸せの流れは見ても客観的な感情しか湧かない。それに反して不幸の流れ……特に『死』の流れは実際に自分が体験しているかのような感覚に陥る。だから嫌いだ。

「……今日はサボるか

これでも学校に行く途中だつたりするのだ。でも、気分がのらないから止めることにした。機械的に動かしていた足をピタリと止めて、どうしようか。少し街を動き回るか。そうすればこのなんだかモヤモヤした気持ちも晴れるかもしれない。

「……？ なんだアレ……？」

暫く当ても無く歩いていたら、目に入ったソレは、今まで見た事の無い『流れ』だった。

「真っ黒じやん……」

そう。ソレは今まで見てきた有彩色ではなくて、完璧な『黒』だつた。しかもそれは誰かに着いているのではなく、何も無い筈の上から……空から伸びているのだ。揺れるまでも無く、ただそこに静止している。

「……棒？」

普通の物なら目を閉じれば見えなくなる筈だが、これは見える。と言つ事はやはり『流れ』なんだろう。ほんの少しの興味心で近付いてみる。

「どんな人生だろう……」

高校に入つてから触れたくないと思っていた筈の『流れ』でも、どうしても触つてみたいと思つてしまつた。見た事の無い色を持つそれは、どんな他人の人生なのだろうか、と。

まるで操られた様にゆっくりとそれに手を伸ばす。後少しで手が

届く、と思ったとき。

「危ないッ！！！」

「え？」

悲鳴にも似た叫びに我に返ると、同時に襲つた衝撃と激痛。触れ  
様と思った黒の流れに垣間見えたのは、暗い笑いだった。

continued

To  
be

はじめまして、紀迺瀬と申します。この度この『AGAINST THE STREAM』(アゲインスト ザ ストリーム)』をお読みださつて真に有り難う御座います。しかし、これは私の気まぐれにより更新するのに果てしない時間を要する事になる可能性があることをご了承下さい。

さて、この『AGAINST THE STREAM』ですが、意味は『流れに逆らつて』です。意味が間違つて、スペルが違うなどありましたら遠慮無く言つて下さい。それでは、また次の機会にお会いしましょう。

## 第一流

眠れよ眠れ良い子は眠れ

眠るな寝るな悪い子寝るな

良い子よ良い子優しい夢を

悪い子悪い子怖い夢を

は悪い子じや

悪夢を見るの

正夢見

るのは良い子じや良い子

お主の夢はどうぢっかえ?

第一流 『天空を舞つ鳥の様に』

「ツ？！」

ガバツ、という効果音をつけて起き上がれば、そこは見た事も無い部屋だった。

「…………どこだ、ここ」

記憶に掠りもしない、妙に和風な造りの部屋を見渡して、俺は呆然と呟いた。その呟きは誰に聞かれるまでもなく消える。ふと、ここで気付く。

「『流れ』が……見えない？」

何時もは鬱陶しいくらいに視界に割り込んでくる色が見えずに、俺は困惑した。そして同時に感じた感情に、更に驚愕する。嘘だ、寂しいなんて思う訳がない。

「どうなつてんだよツ…………！」

唸る様に吐いた言葉は、突如外から聞こえた騒音に搔き消された。ドタドタ、バタバタバタ。騒がしい足音がこの部屋に近付いてくる。そうか、この襖の先は廊下なのか。

「…………」

無意識の内に息を潜めて様子を伺うと、その足音はこの部屋の前で……俺の左横にある襖の向こう側で止まり、数秒の沈黙の後、静かに襖が引かれた。そして現れた先ほどの足音の主は、女。

「はじめて、御初に御目に掛かります神童様。わたくし、神谷（カミヤ）と申しますわ、神童様」

はて、この女性は一体誰に話をしているのだろうか。確かに俺はこの人を知らないから、はじめて、はあつているだろう。だが、『神童』とは、誰の事なのだろうか。

「？ どうかなさいましたか、神童様」

「…………その『神童』とやらは、もしかして俺の事か？」

「はい。然様に御座いますわ。神童様」

なんだろう、この人の笑顔がとても眩しい。後ろに効果音が見える気がしてならない……いや、そんなことは此の際どうでも良い。

一番の問題は

「神童がどうつていつのは後から聞くとして……」「リリゼビリだ？」

今の現在地がわからないことには対処のしようがない。『流れ』が見えないのなら尚更。拉致られてきた訳じゅあるまにし、多分日本のどこかなのだろうけど。

「……申し訳ありませんが、そのことに關しては、わたくしの口から申す事はできません」

「じゃ、誰に聞けと？」

「わたくし共の当主である、青杏（セイアン）様に」  
聞けなかつた。これで逃げるという選択肢は俺の脳裏から消え、残つたのは諦める、というモノだけ。さて、どうじゅう……と、待て。俺は一体どうしてここにいるんだ？

「（俺、目が覚める前までなにをしていた？）」「思い出せ、俺は何を、していた？」

「死んだ……筈じや……」

血の気が引くのを感じた。喉が乾く、息が苦しい。気を失う前の出来事がフラッシュバックする。そうだ、俺は

「神童様」

「！」

掛けられた声に顔を上げると、そこには少しだけ心配そうな色を乗せた笑みでこちらを見遣る神谷とこの女性。何かを言おうと思つたが、完全に渴いてしまつたらしい喉は、言葉を紡ごうとする意思に反して空氣を漏らすだけだった。

「まずは青杏様にお会い下さいまし、神童様」

「……」

言われた言葉に少し間を開けてから頷く。だつてそれしか、選択肢はないのだから。俺がどうなつたか云々はそのセイアン、とやらに話を聞くことにしよう……自分で考えると深みへ落ちてしまふだから。

「それでは、これを御羽織りくださいまし。御水を御持ち致します

わ

「だから、と問うべきではないのだろうが、敢えて聞いたくなる。彼女の手には一着の羽織り。本当に一体どこからそれを取り出したのだろう。暫し呆然としていると、彼女は俺がまだ下半身を潜らせている布団の脇に、静かにそれを置くと、一囗り、という効果音がぴったりの笑顔を浮かべて部屋から出て行った。勿論、襖は閉めて行つたが。」

「……」

無意識の内に詰めていた息を細く吐き出す。なんでだろう、とも疲れた感じがするのは。深呼吸して改めてあたりを見回して見る。まるで時代劇にでも出てきそうな雰囲気なのは、きっと俺の気の所為ではないのだろう。それにちょっとした喪失感を覚えて（どうして？）しかしこのまま意識を飛ばすこともできなくて。唾を飲み込み喉を少し潤した後、結局、俺は置かれた羽織を手に取つた。

「普通に羽織るだけで、良いんだよな……」

淡い緋色のソレに腕を通して、否、通そうとして、俺は今の自分の服装に気付いてピタリ、と動きを止めた。意識を失う前、確かに着ていたのは制服だった。季節は秋で、白を基準としたシャツと上着、襟や裾の部分には学年ごとに違う色のリボンを通して（確か俺のソレは黄だった）、紐のゆつたりとしたズボン。全てが学校指定のソレだった筈だ。だが、だつたら、今俺が着ているのはなんだ？

「……赤い」

そう。白を基準としたそれらは全て真っ赤に染まっていたのだ。余す事無く、シャツと上着は完全に紅に染まり、紐のズボンも所々変色していた。まるで、元からそうだったように。

「……血か？」

恐る恐る、紅く染まつた上着を触つてみる。濡れた感触は無い。血、独特の鉄のような匂いも無い。生身を確認してみても、これと言つた外傷も無い。じゃあ、これはなんの赤なんだ。

「……情報が少ない。今の俺では、答えは出せない」

今自身が置かれている状況さえ把握できていないのに、その延長線上にある問題を先に理解出来る筈が無い。俺はそう考えて、羽織りに腕を通した。ふう、と軽く息を吐いて、かけ布団を退かして立ち上がる。ふらり、とよろめいた足に顔を顰めて、しつかりと足を畳につけて軽くストレッチをしてみた。

バキボキと音がする。俺はどのくらい眠っていたのだろうか。

「神童様。失礼しますが、宜しいでしょうか」

「……ああ」

少し経ち、布団をどじょうかと悩んでいると、襖の向こうから声をかけられた。神谷……彼女の声だ。間を置いて返事を返すと、襖が引かれ、彼女が姿を現した。緩く纏められた長い黒髪がさらりと揺れる。

「御水を御持ち致しました」

「……有り難う」

笑顔で差し出された盆の上にはありきたりなガラスのコップ。並々と注がれた水がたぶん、と音をたてて軽く揺れた。礼を言つてそれをとり、一気に煽つて喉を潤す。冷たい水が喉を通り、イライラと落ち着きのなかつた思考がゆっくりと収まっていくのを感じる。細く息を吐いて、もう一度礼を言い、コップを返した。

「では、青杏様の元へと、ご案内させて頂きます」

絶えず笑顔で言つた彼女は、流れる様な動作でコップをのせた盆を持ったまま立ち上がり、廊下へとでた。諦める事も人生の内では大切なのだと言つたのは誰だつたか。思考の隅で考えながら、彼女の後へと続く。俺が部屋から出ると同時に閉まつた襖に、特に気を配る訳でもなく、盆をするすると裾を引きながら歩いていた他の女性に渡していく神谷に視線をやる。女性は神谷に頭を下げ、俺を視界に入れると、俺にも深く頭を下げた。そして立ち去る女性の背を見遣り、俺は神谷へと目を向ける。

「それでは、参りましょうか」

素人が見てもわかるほど質の良いだろう木材が張られた廊下を歩

きながら、どこかの城の様な細かな装飾が施された柱や天上、壁などに視線をやる。蓮、菊、竜、虎、蝶。事細かに彫られた彫刻や良く分からない模様が至るところで見られるはどうかと思うが、ともすれば寺や神社の如く質素な造りの渡り廊下を歩いたり（それでもやはり材質は良い物の様だつたが）中庭らしき場所は枯山水だつたり普通に池があつて鯉らしき魚が泳いでいたり、とやはり理解し難いもので溢れていた。そしてどこに行こうとも、やはり、『流れ』が見える事はなかつた。

そして約二十分、と言つたところだらうか（もつと長かつたような気がしなくもないが）迷路の様な廊下を歩きまわり着いたのは床の間のような部屋。（しかしそこまでにはただつぱり通路があるが、これも部屋なのだらうか）上座には暖簾越しにだが誰かが座つているのが見えた。

「青杏様。神童様を御連れ致しました」

俺の数歩前にいた彼女は、そう言つて暖簾の向こうにいる人物に頭を下げ、そしてやはり俺にも頭を下げるから脇へと退いた。そこでこの場に、ざつとみ三十人程度だらうか、それ程の数の人がいることに気付いて、軽く瞠目する。これだけの人がいることに気付かなかつた自分に吃驚だ。やはり、『流れ』が見えないとこうも違うものなのか、と絶望にも近い感情を抱く。（それが何に對してなのか、俺は知らない）鬱陶しい、と思考を切り捨てて、上座へと大股で歩み寄る。ざわざわと周りが囁くが、そんなことを気にしているほど暇じゃない。

「アンタか。青杏とかいうのは」

暖簾の5m程前で立ち止まり、睨む様に目を細めて暖簾の向こうにいる人物を見据えて言つた。ざわめきが強くなる。知つた事か。「俺は何故ここにいる？ 何故ここでは『流れ』が見えない？ ここはどこでなんなんだ？ 教えろ、俺に、余す事無く全てのことを」偉そうな口調になつてしまつたがこの際だ。猫を被るのも面倒。不敬だと捕らえられるのならそれでも良い。本当なら……死んでい

たはず。俺が何故生きているのか、ここにはどうで、ここからはなんののか。答えが欲しかった。だから問う。周りの視線など、言葉など、慣れすぎてしまった。そんなものはもう俺を動かさない。知りたいのは、真実。

「……教えましょ。貴方が知りたいと願う全てを。私の名は、青杏。この『狭間の世』を統べる四天の神子のひとりです」

暖簾が引かれ、現れたのは日本人にあるまじき深い青をした髪と瞳を持つ、どこか圧倒されるような雰囲気の青年だった。彼は淡く水色が入った直綴の上に白いまるで十一単の様な（しかしその全ては青みがかった白だ）ものを羽織っていた。

彼の容姿がどうと言つのはもう止めにして。彼の気になり過ぎる言葉に、眉を寄せる。

「……狭間の世？ なんだそれは」

「その通りの意味ですよ、神童殿。世界と世界を繋ぐ場所。常世の国……とも呼ばれますね」

「海の彼方にあると言われる理想郷のことか？」

「はい」

常世の国（とこよのくに）とは、先ほど俺が自身で言つた様に、海の彼方の理想郷などと呼ばれる事がある。他にも『海の彼方にある異世界』、『死後の世界』、『神仙境』、永遠の命をもたらす『不老不死の世界』あるいは『穀靈の故郷』などと信仰的な呼び名が多い。何故知つているか？ 話で『流れ』で見たことがあったから、覚えていただけだ。

「貴方の力について、話しましょうか」

「！ 俺が、『流れ』を見る事ができるのを知つているのか？」

いや、この場合は『流れ』を知つているのかと言う事を聞いた方が良いのかもしれない。脳裏にそんな言葉が過つたが、言つた言葉を訂正しているほどの余裕も無かつた。そんなことよりも早く知りたかったのだ、何故こんなものが俺だけに見えるのか。何故、俺な

のか。

彼は柔らかな笑みから真剣な面持ちへと表情を変え、言つ。

「貴方は私達、四天の神子がそれぞれ奉る神に、この狭間の世を、世界を、全てを総じて統べる者に選ばれたのです」

言われた言葉に思考が固まる。なにを、馬鹿な。ちっぽけな存在でしかない筈の俺が、そんな大層なものになれるわけがない。

「嘘などではないのです神童殿。貴方はこの狭間の世に来るべくして生まれた、神の子なのです」

何を根拠にそんな言葉が言えるのか。

「貴方が今までに見たモノは、神が貴方に与えた試練の様な物。貴方が人の生を知り尚平常でいられるか試す為のものだつたのです」

彼のその言葉に愕然とした。なんということか、俺は今までそんな訳のわからない、望んでもいらないものにされる為に『流れ』が見えて……否、見せられていたというのか。

「本来ならば、もつと歳を重ね世界を見る事ができるようになれば必然に死が訪れている筈でした。しかし、今回の貴方を妬む物が邪魔をしたのです」

ではあの黒い『流れ』は最初から俺を殺すために置かれたのか。と言う事は、だ。どうやら俺はこいつ等の良い様に踊らされていたと言つ事になるわけだ。なんとまあ、滑稽なことか。

「一度死した者は幾等神の子と言えど同じ世界へ、再び生をもたらす事はできないのが私達の決り」

握り締めた拳が震える。怒りとも呆れとも、悲しみとも取れない感情が胸に広がっていく。

「ですから、貴方には今一度、新たに、しかし違う生を与えます」

それが自分の使命なのだと聞いたそうな身振りで、青杏は言つ。きっと彼は知らないのだろう。彼はそれが最善だと信じ、疑う事をしていない。俺にとつて傍迷惑極まりないことを、最初の真剣な表情に昂然とした薄い笑みを浮かべてそんなことをのたまっているのだから。

「その世界では、あまり流れを拒まれませぬ様。御気をつけ下さいませ」

最終的には満面の笑みを浮かべた彼を睨み付けると同時に、引き摺り込まれるような感覚を受け、俺の意識は暗転した。

u  
e  
d  
  
T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n

## 第一流（後書き）

「んにちは、紀迺瀬です。わ、やつと第一話が出せた訳ですが、大分時間がかかってしまったことをここにお詫び致します。しかし、前回のものを見るにあたってその辺りはご理解頂けていると願つてるので次回からはごく間が開けうとも謝罪はいれないかもしません。」  
「ご承下さい。

「イト君……名前が出てしまませんでした。次回からはちゃんと出します。もしかしたら姓が違うものになつている可能性もありますので、そちらへんもご理解下さい。それでは、次回に、またお会いできる事を心より祈つております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4480d/>

---

AGAINST THE STREAM

2010年12月18日18時01分発行